

## 子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割・専門性の検討

### — 教員との比較およびより良い関係づくりの視点から —

池田 衣澄\*  
庄 司 一 子\*\*

#### はじめに

子どものメンタルヘルスの問題は、近年、深刻化しているといえる。松田（2011）は生徒のメンタルヘルスの動向について、首都圏の公立中学校 507 校を対象とした調査を実施し、163 校から回答を得て分析した。その結果、こころの健康状態に何らかの問題を持つ生徒がいる学校は 160 校（99%）で、約半数の学校がこうした生徒が過去 3 年間で増えており、精神医療の専門機関を受診している生徒がいる学校は 84% で、約 3 分の 1 の学校がこうした生徒が増えていると回答しているという。また、日本学校保健会（2014）の全国調査において、保健室利用者のうち記録を必要とする子どもにみられる健康問題の主な背景要因は、主に心に関する問題が 4 割以上を占め、小学校、中学校、高等学校のいずれにおいても主に身体に関する問題の 3 割前後を上回り、メンタルヘルスが学校保健のなかで主たる問題の位置を占めている現状を表していると述べている。

このように昨今の我が国において、子どものメンタルヘルスの問題はその重要性和対応の必要性がいわれている。

一方、それらが言及されると共に、子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割や期待がますます大きくなってきている。文部科学省（2017）は、「養護教諭は、児童生徒の身体的

不調の背景に、いじめなどの心の健康問題がかかわっていること等のサインにいち早く気付くことのできる立場にあることから、児童生徒の健康相談において重要な役割を担っている。」と述べ、養護教諭の役割を中心に現代的健康課題を抱える子どもたちへの支援を策定している。養護教諭の役割への期待は、従来における身体の健康問題のみならず、心の健康問題、すなわち子どものメンタルヘルスにも及び、大変重要であるといえる。先行研究では、異儀田他（2015）が、養護教諭が捉える心の健康問題のサインとそれに関わる養護教諭の技術について、14 人の養護教諭を対象とした研究を行っている。その結果、養護教諭は、生徒の心の健康問題のサインを捉えるため、日常的に生徒全体を観察し、また、生徒を適切に支援するために、注意深く連携の方法を選択していたと報告している。また、飯塚他（2016）は中学校に勤務する養護教諭 1804 名の回答から生徒の心の健康問題とその支援方法について検討を行っている。このように、近年言われてきている養護教諭の子どものメンタルヘルスに関する役割や期待のもと、養護教諭の子どものメンタルヘルスへの関わり方が検討されつつある。しかしながら、このように養護教諭が関わる子どものメンタルヘルスの内容や子どものサインの受け取り方、連携等における技術や支援についての検討はなされているが、そもそも養護教諭が子どものメンタルヘルスをどのようなものとして捉えているのかについて、養護教諭独自に検討されたも

\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程

\*\* 筑波大学人間系

のというのは管見の限り見当たらなかった。

また、期待が高まっているとはいえ、学校現場において、養護教諭が1人で子どものメンタルヘルスの問題に対応するわけではない。近年、養護教諭は他の教職員や学校医などの専門スタッフと連携し、学校において様々な取組を行うとともに、家庭や地域における取組を促すことが求められている（文部科学省, 2017）。その中でも校内における他の教員との連携の重要性・必要性は述べるまでもないほどであろう。阿野他（2001）は養護教諭で情報交換を行う場を設け、その効果について検討を行っている。養護教諭が自身の校内で話題提供をした際に、ポジティブな感想をもらい、対応について他教師との共通理解ができてきたという安心感から、保健室で知り得た生徒の情報について、他教師と共有する幅が広がった、と報告している。その一方で、堀他（2002）の事例によれば、教員は神経症などの心の病気、精神疾患は特別なことではなくそのための配慮は不要であり、保健室登校は特別なケースとして扱えないと考えていたと報告している。そして、甘佐他（2011）は、精神疾患への早期介入において、養護教諭の介入をさらに困難にしているものとして、「一般教諭の保健室・養護教諭への無理解」「学校現場における養護教諭・保健室への期待」の2点を挙げている。さらに、富樫（2017）も組織化の困難性において、「共通認識を得る難しさ」「関係づくりの難しさ」「管理職の理解度の違いによる組織力の差」が挙げている。

先のように、養護教諭と他の教員との連携の重要性・必要性がある中、このように考え方や共通認識の違いにより、子どものメンタルヘルスへの対応の困難さが生まれていると考えられる。ただし、森田他（2006）が、「校内教職員との連携は子ども理解をめぐる、あるいは主導権をめぐる内面的な葛藤や指導観の違いによって円滑にいく場合もあれば、極めて困難な場合もある」と述べているように、捉え方や考え方の違いが必ずしも悪いと主張しているわけではないことは強調しておく。子どものメンタルヘルスに関する捉え方に対し、共通することは

何か、違いは何か、それらを認識した上で、各々の立場で協力し、どのように対応していくか、どのような自身の役割を担い、専門性をどう生かすのかということを含味していくことで、より良い関係性を構築し、連携を行うことできると考える。

以上のことから、本研究では、養護教諭と教員との子どものメンタルヘルスに関する捉え方の比較検討を行うことで、教員とのより良い関係づくりのもと、養護教諭自身の役割・専門性についての示唆を得ることを目的とする。

## 研究方法

### 1. 研究対象者

小中学校の現職の養護教諭または養護教諭経験者5名、小中学校の現職の教員または教員経験者5名を対象とした。

### 2. 調査期間

2018年1月に実施した。

### 3. 調査方法

調査者が接触可能な養護教諭および教員に依頼、同意を得られた対象者とした。

養護教諭、教員ともに1人60分程度の半構造化インタビュー調査を1回行った。インタビュー内容は、対象者の同意を得て録音した。

対象者には、基本属性として、性別、年齢、経験年数をたずねた。また、インタビュー内容としては、①「子どものメンタルヘルス」とはどのようなことだと思うか、②養護教諭の「子どものメンタルヘルス」に関する役割や期待についてどう思うか、③「子どものメンタルヘルス」へのアプローチについて難しいなと感じることは何か、④養護教諭の教員との関係づくり・連携に関する工夫は何か（養護教諭には自身の工夫や実際に行っていること、教員には養護教諭によって工夫や関係づくりが行われていると感じていること）について、対象者の考えを自由に語ってもらった。

なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て実施された。（倫理審査承認 課題番号：筑29-188）

#### 4. 分析方法

グラハム (2017) の「SAGE 質的研究キット：質的データの分析」を参考に、インタビュー内容を意味のある文節ごとにコード化した。

さらに、コード化したものについて類似している内容ごとにまとめ、カテゴリーとし、各カテゴリーに関して発言した人数と件数を求めた。

なお、コードおよびカテゴリーの作成にあたっては、学校心理学の専門家および同大学院の院生の助言を受けた。

### 結 果

#### 1. 対象者の基本属性

対象者の基本属性について、養護教諭の性別は女性 5 名、平均年齢は 38.0 歳 (20 代前半 1 名、20 代後半 1 名、30 代後半 1 名、40 代前半 1 名、50 代後半 1 名)、経験年数の平均は 15.6 年であった。また、教員において、性別は男性 2 名、女性 3 名、平均年齢は 46.4 歳 (30 代前半 1 名、40 代前半 2 名、50 代前半 1 名、60 代後半 1 名)、経験年数の平均は 16.8 年であった。

#### 2. 子どものメンタルヘルスの捉え方

子どものメンタルヘルスの捉え方について、養護教諭、教員ともに 4 つのカテゴリーを抽出した (表 1) (表 2)。人数を ( ), コードの件数を <> で示す (以下、表 3～表 8 においても同様の記載方法をとる)。

子どものメンタルヘルスについて、養護教諭は「重要なもの」として捉えている傾向がみられた。一方、教員は「日常的支援が必要」という捉え方について、語られていた。

また、養護教諭と教員において、「身体とつながっている」、「精神・心の健康」、「対応が困難」に関して、同様に抽出された。その中で、特に「身体とつながっている」に関しては、養護教諭の方が教員よりも、人数、件数ともに多い傾向がみられた。

#### 3. 養護教諭の役割や期待

養護教諭の役割や期待について、養護教諭は 6 つ、教員は 4 つのカテゴリーを抽出した (表 3) (表 4)。

表1 子どものメンタルヘルスの捉え方 (養護教諭)

カテゴリー	コード
重要なもの (4人) <6件>	「保健室で重要なもの」「学校における重要なこと」 「養護教諭としての課題」 「子どもが健康であることの条件」 「子どもにとって大切なこと」「大事なこと」
身体とつながっている (3人) <5件>	「身体と結びついている」「身体の問題と切り離せない」 「身体の健康と共にみていく必要がある」 「不調が身体にあらわれる」 「身体と繋がっている」
精神・心の健康 (3人) <3件>	「精神の健康」「心の健康」「疾患」
対応が困難 (2人) <3件>	「大人の精神科とは違う」「難しい」「漠然としている」

表2 子どものメンタルヘルスの捉え方 (教員)

カテゴリー	コード
日常的支援が必要 (4人) <6件>	「日常的に行う観察や相談」「生徒指導」 「教員側からの積極的な対応」「生徒対応」 「心に寄り添った立ち直れるような支援」 「捉え方やサポートの検討」
対応が困難 (2人) <2件>	「難しい」
精神・心の健康 (1人) <1件>	「心や気持ちに関するもの」
身体とつながっている (1人) <1件>	「身体や態度にあらわれる」

養護教諭は、「役割の負担感」、「コーディネーター」としての役割について、多くのことが語られており、さらに「役割を求められていることの自覚」についても語られる傾向にあった。

一方、教員からは、養護教諭の役割や期待として、「子どもの情報の提供者」が最も多く語られていた。また、「子どものメンタルヘルスケア」をはじめとした、直接的な子どもへのアプローチに関する内容が語られながら、「専門性の提供」が語られており、養護教諭に対し、子どもたちや自分たちに対して、専門性を提供することを求めている。

#### 4. 子どものメンタルヘルスに関する困難

子どものメンタルヘルスに関する困難について、養護教諭は 3 つ、教員は 6 つのカテゴリーを抽出した (表 5) (表 6)。

養護教諭は「子どもの理解」に関する困難感が多く語られていた。

養護教諭と教員どちらも保護者との連携をは

表3 養護教諭の役割や期待（養護教諭）

カテゴリー	コード
役割への負担感 (5人) <9件>	「先輩がいるから」負担には感じない」「重荷には感じない」 「自分がやりたいことがやれているので重荷には感じない」 「連携役になると養護の専門家ではいれなくなる」 「連携役によって疲弊する」「担任の先生を待つ時間がある」 「カウンセラーから担任への伝達に自信がない」 「負担感はある」「重荷、負担に感じる」
コーディネーター (3人) <6件>	「コーディネート力が求められる」 「どこにつながるかを見極める」 「つなげる」「つなげた先からフィードバックをもらう」 「コーディネート」「連携役」
役割を求められていることの自覚 (3人) <3件>	「以前と比べて役割が変化している」 「養護教諭としての役割を求められている」 「養護教諭としての役割を求められているのを感じる」
役割への責任感 (2人) <4件>	「積極的にやらなければならない」 「養護教諭として何ができるかを考える」 「保健室にきてくれた子どもに養護教諭としての役割を果たす」 「養護教諭としての役割を果たさなければならない」 「養護教諭だからできることがある」
子どもの受け皿 (1人) <1件>	「子どもを最初に受け止める」
子どものメンタルヘルスケア (1人) <1件>	「メンタルヘルスへの対応が多い」

表4 養護教諭の役割や期待（教員）

カテゴリー	コード
子どものメンタルヘルスケア (3人) <3件>	「悩んでいる子へのケア」 「（身体だけでなく）子どもの精神的なサポート役」 「身体だけでなくメンタル的なケアもできる」
子どもの情報の提供者 (3人) <5件>	「子どもの情報をもっている」 「子ども全体を詳細に知っている」 「子どもの情報を収集する」 「集めた子どもの情報を必要に応じて提供する」 「情報交換をする」
専門性の提供 (2人) <4件>	「養護教諭としての専門性がある」 「専門的処置を行う」「専門的判断をする」 「専門家として子どもたちに対応する」
子どもの相談役 (2人) <3件>	「子どもの話を聴く」「子どもの相談役」 「相談役」
子どもに安心を提供する (2人) <3件>	「子どもの安心の基地」 「子どもが落ち着ける場所と時間の提供」 「行きやすい場所と雰囲気がある」

表5 子どものメンタルヘルスに関する困難（養護教諭）

カテゴリー	コード
子どもの理解 (3人) <6件>	「10代の子どもの感覚を理解すること」 「子どもの悩みを全て受け止めること」 「子どものニーズの見極め」「子ども一人一人が違う」 「子どもが多い（大規模校）と子どもの不調に気が付きにくい」 「子ども本人の理解を得ること」
関係者との連携 (3人) <5件>	「保護者や担任にどうつなげるか」「家族の理解を得ること」 「親の理解を得ること」「周囲の大人の理解を得ること」 「共通認識をもつこと」「教員の主観が入ってくる」 「教員の考え方や意見のすり合わせ」 「子どもが困っているという事実を認識できない教員の存在」
問題との関わり (3人) <3件>	「踏み込むボーダーライン」「養護教諭としてどう関わるか」 「保健室登校」「不登校」

表6 子どものメンタルヘルスに関する困難（教員）

カテゴリー	コード
保護者との連携 (2人) <3件>	「背景にある保護者の存在」 「家庭の無理解による悪循環がある」 「家庭に子どもをフォローする環境がない」
教員との連携 (1人) <5件>	「教員の理解を得ること」「教員の理解が遅れている」 「教員の知識が遅れている」「教員が経験則で判断する」 「教員が対応を柔軟性に欠ける」
問題との関わり (1人) <4件>	「解決に時間を要すること」「ひとつひとつが難しい」 「不登校」「学級内トラブル」
SCとの連携 (1人) <2件>	「専門家（SC）につなぐ判断」 「SCへの相談時間が限られている」
養護教諭との連携 (1人) <2件>	「養護教諭が問題を抱えてしまうこと」 「養護教諭が子どもと適切な距離を保てないこと」
他の子どもとの関わり (1人) <1件>	「別の子どもの協力を上手に得ること」

はじめとした、関係者との連携に関する困難感について多く語られる傾向があった。また、「問題との関わり」という子どものメンタルヘルスの問題そのものに対応することへの困難感が多く語られていた。

### 5. 養護教諭の教員との関係づくり・連携に関する工夫

養護教諭の教員との関係づくり・連携に関する工夫について、養護教諭は7つ、教員は3つのカテゴリーを抽出した（表7）（表8）。

表7 養護教諭の教員との関係づくり・連携に関する工夫（養護教諭）

カテゴリー	コード
些細なことで話すことを意識する (3人) <5件>	「話すことを意識する」「些細なことで話をする」 「何でもない話をする」「積極的に話しかける」 「プライベートな話をする」
保健室での子どもの情報を伝える (2人) <4件>	「担任に子どものポジティブフィードバックをする」 「保健室での情報を伝える」 「教員向けの保健だよりの作成」 「有効な伝達手段を選択する」
直接話すことを意識する (2人) <2件>	「直接話をする」「直接担任に伝える」
学校外での関わり (2人) <2件>	「飲み会に行く」「食事会に行く」
共通認識を得る (2人) <2件>	「同じ目標をもつ」「共通認識のもとに行動する」
養護教諭としての役割を果たす (2人) <2件>	「子どもが誰を必要としているのかを選択する」 「自分たちができることはする」
関係者と相談・確認をする (1人) <4件>	「他の養護教諭の意見をきく」 「他の教職員と事前によく相談をする」 「管理職と確認をする」「親の納得を得る」

表8 養護教諭の教員との関係づくり・連携に関する工夫（教員）

カテゴリー	コード
様々な形での情報提供 (4人) <10件>	「保健室での状況をメモでくれる」「記録に残してくれる」 「紙面での情報提供」「細かな連絡」「声かけ」「口頭で伝える」 「情報をきちんと流す」「密に情報交換ができる」 「会議での情報提供<2件>」
情報提供の方法 についての工夫 (3人) <5件>	「適切な情報提供先の選択<2件>」「伝達手段を選択する」 「教員の子どもへの理解を促すような情報提供をする」 「客観的情報と主観的情報を明確に分けて伝えてくれる」
関係者の コーディネート (3人) <4件>	「共通認識を得やすい」「教員間の橋渡し」「保護者の受け皿」 「(同性や自身が初任者だったこともあり)面倒をみてもらった」

養護教諭では、「些細なことでも話すことを意識する」こと、「保健室での子どもの情報を伝える」ことを心掛けていることが多く語られていた。

一方、教員は、養護教諭が「様々な形での情報提供」を行ってくれていることを認識しており、日常的に養護教諭が情報提供における工夫や意識をしてきているという語りが多くみられた。

## 考 察

### 1. 「子どものメンタルヘルスの捉え方」

養護教諭は、子どものメンタルヘルスを「重要なもの」という捉え方をしていた。先に述べたように、近年、養護教諭の役割として、子どものメンタルヘルスに関しても期待されている背景を踏まえ、養護教諭自身も子どものメンタルヘルスの重要性を理解していることが示された。一方、教員は、「日常的支援が必要」と捉えていた。これは、教員が、メンタルヘルスの問題の有無に関わらず、授業等の日常的な学校生活の中で子どもたちと関わっており、それらの日々の生活の中で子どものメンタルヘルスにも携わり、問題が生じた際は、その日常の中で対応していくことになるという認識があるためだろう。よって、子どもたちが教室においてどのような様子であるか、養護教諭が日常的な情報をそのような認識のある教員に提供を求めることは妥当であり、かつ重要であるといえる。

また、「身体とつながっている」は養護教諭にも教員からも挙げられていたが、養護教諭の方が多くのコードが見られていた。中畑（1997）

によれば、保健室におけるメンタルヘルスへの介入において、養護教諭は「からだの痛みに変えて必死に訴えているころのサインを理解し、少しずつではあるが、日々変わっていく様子を、他の教員にも分かるように伝えることで、何人もの教員が子どもを見守ってくれることにつながる」と述べている。養護教諭は、日常的に子どもの身体に触れることも多く、身体状況の把握という役割及び専門性があることで、子どものメンタルヘルスと身体との関連について意識しやすい傾向にあるのではないかと考えられる。このことから、養護教諭は、教員から子どもの身体的情報について求めることや、教員と情報共有を行う際に、身体状況についても触れながら伝えていくことが重要な役割であり、専門性であると考えられる。またそうすることで、子どものメンタルヘルスにおける身体情報の重要性を教員自身にも理解してもらい、教室においても意識してもらえるようになることで、早期発見やより良いアプローチを行うことが可能となるだろう。

### 2. 「養護教諭の役割や期待」

養護教諭の役割や期待において、養護教諭からは、「コーディネーター」としての役割が語られていた。富樫（2017）は、養護教諭の役割は「適切なアセスメントを行い、見通しを立てる」「専門性を自覚し、主体性を持って適切に対応する」「コーディネーターの役割を果たし、学校を動かす力となる」であり、専門性に関しては「学校外との連携を推進するマネジメント、コーディネーター」「学内での役割の明確化と信頼関係」「学内システムの構築」「専門性を高める自己研鑽」であると報告している。この他にも、養護教諭の役割として、コーディネーターに焦点化されたものは比較的多く検討がなされている（小貫・庄司，2019）。さらに、「役割を求められていることの自覚」についても語られていたことから、時代の変化に応じて、自分たちの役割の重要性、特に「コーディネーター」としての役割を、養護教諭自身も自覚していることがわかる。養護教諭がコーディネーターとしての活動を活発化することは、養護教諭自身の職

務満足感全般に対して正の影響を及ぼすと報告されている（秋光・白木，2010）ことから、コーディネーターとしての役割を担い、専門性を生かしていくことは、養護教諭自身にとっても有益であると考えられる。

また、「子どものメンタルヘルス」というコードが養護教諭と教員から同様に挙げられていた。同時に、教員において「子どもの情報提供者」、「子どもの相談役」、「子どもに安心を提供する」、「専門性の提供」が挙げられており、養護教諭にそれらの役割についても求めていることがわかる。岡田（2016）は、メンタルヘルスに関わる学校内の職種としてはスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等が存在するが、いずれも原則、非常勤職員であり、それゆえ常勤の教員である養護教諭が重要な役割を担うと述べている。養護教諭が子どものメンタルヘルスにおいて重要な役割を担い、その専門性を提供することについて、養護教諭自身も教員も理解していることが伺え、養護教諭と教員間において、共通認識として浸透しつつあることが考えられる。

その一方、養護教諭では、責任感、負担感についても多く語られていた。このことから、養護教諭に任せきり、任せればよいといった事態にならないように、子どものメンタルヘルスに携わる際の養護教諭自身への負荷についても着目し、検討を行っていく必要性が考えられる。また、養護教諭は、学校という組織の一員であることから、先の養護教諭の役割・専門性への期待が、良い方向に作用するよう、学校内における組織的な体制においても、理解と検討がなされ、整備していく必要がある。さらに、今後も外部における研修等、知識・技術面のサポート体制の充実も求められるだろう。

### 3. 「子どものメンタルヘルスに関する困難」

子どものメンタルヘルスに関する困難において、養護教諭では「子どもの理解」が語られていた。これは養護教諭が、日頃から真摯に子どもに向き合っている、子どものあらゆる背景や事情を十分に理解しようという高いハードルを設定し、日々奮闘している故の困難感であると

考える。三森（2017）によれば、初任者養護教諭は「児童生徒とかかわる難しさがわかる」ことや、自らの実践を内省しながら実践する繰り返しにおいて能力成長と精神的成長をしているという。この困難感がポジティブに作用することにより、養護教諭は子どもたちに対し、日々試行錯誤し、より洗練されたアプローチを行うことができていると考えられる。

また、養護教諭では「関係者との連携」が挙げられ、保護者や教員との連携の困難さについて語られていた。一方、教員においても、「保護者との連携」が挙げられており、養護教諭と同様、保護者の対応への困難さが共通しているといえよう。また、同様に養護教諭と教員ともに「問題との関わり」が挙げられており、子どものメンタルヘルスの問題そのものとの関わりを困難に感じていることがわかる。なお、先の子どものメンタルヘルスの捉え方においても困難感も共通してみられていた。富樫（2017）は養護教諭へのインタビューの結果から、支援のキーパーソンとなる担任教員との関係づくりにおいて、「お互いのメリット、お互いの幸せ」や「担任教師が困っているのを助ける」、「一緒に成功体験」というコードが得られたと述べている。このことから、養護教諭と教員が、共通した困難感をつかち合い、また共感をしながら、共に子どものメンタルヘルスへのアプローチを行っていくことは、より良い関係づくり、延いては連携の鍵になるのではないかと考えられる。

また、養護教諭では先行研究と同様に教員との関係の困難感が語られていたが、教員においても「教員との連携」を困難に感じていた。同じ立場の教員同士であってもその連携に困難さを感じているからして、立場の異なる養護教諭が教員に対し、困難さを感じているのが頷ける一方で、同じ教員という立場であるために、教員同士で理解を得づらいう可能性もあるだろう。阿野他（2001）は、養護教諭は子どもへの関わりにおいて、他職員と連携をとりながら学校組織の中で円滑に関わっていける技量も必要であると述べている。養護教諭自身も困難に感じていることではあるものの、その専門的立場から、

他の教員同士の橋渡しの役割を担うことも十分にある。先のコーディネーターの役割がいわれていることから、円滑な橋渡しが行えるよう、研鑽の必要性が出てくるだろう。さらに教員において、「SC（スクールカウンセラー、以下SC）との連携」への困難感も語られていた。主に教室で子どもと関わる教員においては、SCといざ関わらなければならないという際に、立場上の距離感、専門性の違いによる考え方の相違等もあり、難しい現状もあるだろう。そのようなときに養護教諭が仲介役となって関係性をつくることもまた一つの重要な役割となるだろう。新井・庄司（2014）によれば、養護教諭は独自の専門的視点に加え、教師と臨床心理士に特徴的な視点も部分的に有しており、両者の中間的なアセスメントを行っている可能性があるとして述べている。そのように、養護教諭は、教員とSCの両方の視点を有していることから、両者の橋渡しをするという役割は適任である。また、昨今スクールカウンセラーの配置が進み、スクールカウンセラーとの協働も養護教諭の課題として認識されている（安林, 2012）。以上のことから、SCとの連携において養護教諭の役割は重要であるといえ、困難を感じている教員に対してでも貢献できると考えられる。

#### 4. 「養護教諭の教員との関係づくり・連携に関する工夫」

教員との関係づくり・連携に関する工夫について、養護教諭からは、「些細なことでも話すことを意識する」、「保健室での子どもの情報を伝える」、「直接話すことを意識する」等、細かなことから、様々な工夫について意識していた。他にも「学校外での関わり」をもつことや「共通認識を得る」、「関係者と相談・確認をする」ことを意識しながら、子どもに対しても、教員に対しても「養護教諭としての役割を果たす」ことを大切にしており、先述しているような期待に応えるため、日々健闘していることが伺えた。一方、教員からは、「様々な形での情報提供」、「情報提供の方法についての工夫」が語られており、養護教諭が情報提供においても、先に挙げられたような細やかな工夫をしてくれている

という認識が教員にも伝わっていると考えられる。西尾・木幡（2006）は連携・協働するためには、日頃から、一人ひとりの子どもの支援を互いに協力し合って行おうという雰囲気を作ることが不可欠であり、そのためにも報告のタイミングや内容が重要であると述べている。このことから、子どものメンタルヘルスに対し、より適切なアプローチを行っていくため、養護教諭の工夫は不可欠であり、またそれらを教員が認識し、お互いに理解することで円滑な情報共有、連携がなされていくといえる。

加えて、教員からは「関係者のコーディネーター」が語られていた。先の養護教諭の役割や期待の際に挙げられることや、直接「コーディネーター」という言葉で語られることはなかったが、工夫や関係づくりという観点から、日常的に養護教諭がコーディネーターを行ってくれているという認識が教員にもあると考えられる。このことから、前述してきているように、今後、養護教諭のコーディネーター力がより一層求められていくだろう。

## 結 論

本研究の目的は、養護教諭と教員との子どものメンタルヘルスに関する捉え方の比較検討を行うことで、教員とのより良い関係づくりのもと、養護教諭自身の役割・専門性についての示唆を得ることであり、以下の結果を得た。

1. 子どものメンタルヘルスに関わる際に意識的に子どもの身体的情報との関連性に触れ、その重要性を伝えていくことは養護教諭の重要な役割・専門性であることが示唆された。
2. コーディネーターとしての役割を養護教諭は自覚しており、同時に教員からも求められていることが明らかとなった。その一方で、養護教諭の負担感についても検討を行い、体制を整える必要性が示唆された。
3. 教員においても、養護教諭と同様に保護者等の関係者との連携への困難感が存在することから、それらの困難感への共感を行いながらアプローチを行うことが、より良い関係づくりに

寄与するのではないかということが示唆された。  
4. 養護教諭は、情報共有においても、日頃から細やかな工夫や意識をしていた。一方、教員もそのことを理解しており、養護教諭の日々の工夫や意識は、円滑な情報共有、連携のためにも重要であることが示唆された。

### 研究の限界と今後の課題

本研究は一部の養護教諭および教員から質的に調査したもので一般化するには限界がある。そのため、今後の課題として、本研究結果を参考に、今後は多くの養護教諭や教員を対象とした量的研究へと発展させ、一般化を目指す必要性が考えられる。

### 謝 辞

学校現場にて、日々、子どもたちのことを考え、大変お忙しいところ、本研究・調査へのご理解とあたたかいご協力を賜りました養護教諭および教員の先生方に深く御礼を申し上げます。

### 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

なお、本研究は日本学校保健学会第 65 回学術大会（2018）にて発表、後に修正したものである。

### 引用・参考文献

秋光恵子・白木豊美（2010）. チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響 教育心理学研究, 58, 34-45.  
甘佐京子・長江美代子・土田幸子・山下真裕子（2011）. 中学校養護教諭の語りからみえてきた問題行動を示す生徒への対応の現状と課題 精神疾患への早期介入に向けて 人間看護学研究, 9, 99-105.  
阿野和子・熊野恵子・永松公子（2001）. メン

タルヘルスケアに関する養護教諭の執務研究～学校組織の中で円滑に機能するには～ 研究集録, 36, 20-23.

新井雅・庄司一子（2014）. 臨床心理士、教師、養護教諭によるアセスメントの特徴の比較に関する研究 心理臨床学研究, 32（2）, 215-226.

グラハム・R・ギブズ. 砂上史子・一柳智紀・一柳梢（訳）（2017）. SAGE 質的研究キット 6 質的データの分析 新曜社

堀恵美子・今田里佳・上村恵津子（2002）. 個に応じた教育をめざす連携における養護教諭の役割 教育実践研究, 3, 67-76.

異儀田はづき・小山達也・嵐弘美・犬塚あつ子・田中美恵子・犬飼かおり…松寄英士（2015）. 中学校に勤務する養護教諭が捉える生徒の心の健康問題のサインとそれに関わる養護教諭の技術 東京女子医科大学看護学会誌, 10（1）, 1-10.

飯塚あつ子, 田中美恵子, 松寄英士（2016）. 中学校に勤務する養護教諭が関わる生徒の心の健康問題とその支援方法. 日本養護教諭教育学会誌, 20, 65-74.

松田修（2011）. 首都圏の中学生の最近のメンタルヘルス問題 公衆衛生誌, 58, 111-115.

三森寧子（2017）. 初任期養護教諭が成長する経験とその要因 聖路加看護学会誌, 21（1）, 12-19.

文部科学省（2017）. 現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/01/1384974\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2017/05/01/1384974_1.pdf)

森田光子・木幡美奈子・清水花子（2006）. 健康相談活動における連携・協働に関する研究の動向 学校健康相談研究, 3（1）, 1-10.

中畑朋美（1997）. 保健室におけるメンタルヘルス～ともに寄り添い歩む相談活動～ 研究集録, 32, 19-22.

日本学校保健会（2014）. 平成 26 年度版 学校保健の動向 日本学校保健会



- 西尾玲子・木幡美奈子（2006）. 健康相談活動の事例を振り返りながら連携・協働を考える 学校健康相談研究, 3 (1), 11-15.
- 富樫和枝（2017）. 精神保健に関する早期発見対策における問題点 養護教諭の役割・専門性 東北文化学園大学看護学科紀要, 6 (1), 11-21.
- 岡田加奈子（2016）. 保健室から見た子どものメンタルヘルスと養護教諭の役割 精神科治療学, 31(4), 501-506.
- 小貫衣澄・庄司一子（2019）. 子どものメンタルヘルスにおける養護教諭の役割・専門性に関する研究動向—学校保健分野を中心に— 共生教育学研究, 6, 101-112.
- 安林奈緒美（2012）. 保健と教育が交錯する場における養護教諭の役割 学校管理職へのインタビュー調査を手掛かりにして 保健医療社会学論集, 23 (1), 74-84.

## Examination of Roles and Expertise of Yogo Teachers in the Mental Health of Children : Focusing on the Difference from the Way Teachers Perceive

Izumi IKEDA  
Ichiko SHOJI

**Background:** Children's mental health is an important issue in Japan today. Under such circumstances, Yogo teachers are expected to play a critical role in understanding the mental health of children.

**Objective:** The purpose of this study is to compare the views of Yogo teachers and teachers regarding the mental health of children, and while considering the creation of better relationships with teachers, suggest the roles and expertise of Yogo teachers.

**Methods :** The subjects of the survey were 5 incumbent Yogo teachers or experienced them, and 5 incumbent teachers or experienced them. We conducted a semi-structured interview survey of about 60 minutes per person.

**Results:** First, regarding how to understand the mental health of children, we classified their answers into four categories each; for Yogo teachers, their answers were sorted into categories such as "Important thing" and "Connected to the body." For teachers, their answers were sorted into four categories such as "Need daily support". Second, as to the roles and expectations of Yogo teachers, we classified Yogo teachers' answers and those of teachers into six and four categories each. Six categories of Yogo teachers' answers included "Coordinator", and those of teachers included categories such as "Mental health care for children". Third, for difficulties related to children's mental health, Answers of Yogo teachers were classified into three categories such as "Understanding of children" and those of teachers were classified into six categories such as "Cooperation with parents". Finally, As for ingenuity in building relationships and cooperation with Yogo teachers, Yogo teachers comments were classified into seven categories such as "Awareness of talking even trivial matters" and those of teachers were classified into three categories such as "Providing information in various forms" from teachers.

**Conclusion:** It was suggested that it is an important role and expertise of Yogo teachers to consciously mention the relationship with the child's physical information and convey its importance when it is related to the child's mental health. In addition, it became clear that Yogo teachers are aware of their roles as coordinators and teachers are also demanding them. On the other hand, it was suggested that it is necessary to prepare a system by examining the burden on Yogo teachers. Furthermore, teachers also have a sense of difficulty in coordinating with related parties such as parents, as in the case of Yogo teachers. Therefore, it was suggested that taking an approach while empathizing with those feelings of difficulty may contribute to the building of better relationships. Finally, Yogo teachers have always paid detailed attention to information sharing. Teachers also understand them, and it was suggested that the ingenuity and consideration of Yogo teachers are important for smooth information sharing and cooperation.